

# 「気付き」をくれる56のストーリー

月刊URALA編集長 宮田 耕輔

今回皆さんのが投稿を拝見し、感じた言葉が一つあります。「気付き」という言葉です。

ともすれば私たちは平穏な毎日を送っていると“今日と変わらない明日がやってくる”と思ってしまいます。朝起きて仕事場に向かい、夕方まで仕事をして夜にごはんを食べて寝る。そして翌日も朝起きて……。この繰り返しができることの幸せはあるかもしません。しかし、繰り返しは時にさまざまなものの“本質”を忘れ去ってしまうのでは、と思います。何のために仕事をしているのか、何のためにこの行動をしているのか、そして何のために生きているのか、と。

人々は見えない恐怖に押しつぶされそうになっています。見えないから余計ストレスにもなります。今回投稿された方々もそうだったでしょう。それでも、一つでも、小さくても、喜びを見つけ、その喜びを伝えたいと書いていただいたと思います。辛さ、大変さ、苦悩、その思いは行間に溢れていました。

しかしその喜びこそが、毎日が当たり前すぎて忘れていました。

た“本質”だったと思います。

仕事をする喜び、人に感謝される喜び、みんなで達成した喜び。一人ひとりが「気付き」を得たのではないでしょうか。

気付いたからこそ、小さなこ

とでも喜びを得られたのではないでしょうか。そしてその喜びが本来、その仕事や行動の原動力になつてはいなかつたでしょうか。この『つなぐ福幸メッセージ』は皆さん一人ひとりの原動力の集大成のような気がします。

今回、投稿いただいた方だけが得た「気付き」もあつたと思います。「文章を書くのは難しい」ということです。経験はしても言語化するのは難しいのです。経験は思考と行動の結果の連續です。この連續性をつなげる作業がどれほど大変か。何度も書き直した方もいらっしゃったと聞きます。大変な中に苦労を重ね、時間をかけて書き上げたからこそ想いがこもっています。是非この街で綴られた56の小さなストーリーを楽しんでいただけたらと思います。

